



岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Alcudia

O K A Z A K I M S | VOL. 30
C I T Y M U S E U M S
N E W S



エッセイ
酒井の殿さま

特別企画展
徳川四天王 -天下統一の立役者たち-

額田 -その歴史と文化-

レポート
実り多き子どもワークショップ

重文
関ヶ原合戦図屏風(部分)
大阪歴史博物館蔵

岡崎
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術博物館

酒井の殿さま

館長 芳賀 徹

今もなほ殿と呼ばれることありて

この城下町にわれ老いにけり

ちょっと面白い、めずらしい歌だ。山形県鶴岡の酒井家第17代当主であった酒井忠明^{ただあきら}氏の作である。平成15年正月、氏は宮中歌会始に召人^{めしうど}として招かれて、この一首を詠進した。皇居の正殿松ノ間で、講師・発声^{こうじ はっせい}らがこの歌をあの特徴ののびやかな節まわしで朗誦したとき、正面に着座された天皇陛下はかすかにほほえまれたという。この席に選者として列席していた歌人の岡野弘彦氏が、そのときの印象を次の一首に詠んで、これを忠明氏の最後の歌集『洗心』（平成15年）の巻頭に「ことほぎの歌」として寄せている。

大君もほのかに笑みて聞きます
出羽の殿の新年の歌

上の忠明氏の歌自体が、殿さまならではの悠場迫らざる風格もっている。かつて一族の「城下」であったこの町に長い歳月を暮して老いてゆく自分を、なんのてらいもなく肯定している。そのことを陛下もよく感じとられて嘉^{よみ}されたのであつたらう。

忠明氏はこの御歌会始の翌年、平成16年2月の末に、鶴岡市内の病院で、窓外に眞白な月山を見晴らかしながら亡くなった。病状が進んでからも、見舞いに来たお孫さんに「お金貯めずに、肺に水貯めた」などと、いつもながらのユーモアで笑いかけていたという。氏は大正6年（1917）の鶴岡生まれであったから享年87歳。歴代の酒井家当主のなかでは一番の長寿となったことをよるこんでおられたという。

いうまでもなく、忠明氏は、今回の特別展「徳川四天王」の一人、榊原、井伊、本多の諸侯とならぶ酒井忠次から数えて17代目の後裔であった。忠次もその子家次も徳川家康に仕えてその柱となった譜代の名門だが、三代目の忠勝は元和8年（1622）、信州松代から移って出羽鶴岡13万8千石の藩主となった。それ以来なんと四百年近く、酒井家はずっと庄内藩の殿様であり、ただ殿様であっただけでなく、明治の廃藩置県以後もなお今日まで城下鶴岡に住みつけ、代々市民の敬慕の的となってきたのである。全国の旧大名家のなかでも数少ない例の一つであろう。

天保年間には越後長岡に転封を命ぜられたことがあったが、領民の阻止運動が起きて沙汰やみとなった。幕末には藩内の佐幕派が公武合体派を抑えて奥羽越列藩同盟の主力として官軍と善戦して後に降伏、酒井家はいったん廃されたがすぐにまた復帰を許され、明治5年（1872）には奉禄を失った旧藩士3000人が旧藩家老菅実秀^{すがじつしゅう}の指揮の下に月山山麓の松ヶ岡開墾を開始したりもした。これが幾多の苦難と工夫をへて、つい最近まで一種の共産的小共同体として経営をつづけてきたなどというのも、庄内藩ならではの結束の力と精神力の発露であつたらう。

その武士的精神力を支えたものの一つに、戌辰の役のときの敵軍の総督西郷隆盛の遺訓があったというのも、庄内流の劇的な展開である。西郷が敗者の庄内勢をきわめて寛大に処遇^{ただすみ}してくれたことに感激して、当時の若い藩主酒井忠篤や菅が東京にま



酒井忠明氏

た鹿児島までも西郷詣でをし、その人徳と見識の偉大を庄内に伝えたのだという。藩塾致道館は創立以来荻生徂徠の学問を奉じてきたが、そこに南洲翁の敬天愛人の思想が加わって、城下町鶴岡の沈深たる精神風土は培われたのである。小学生の男女がいまも旧藩塾の座敷にかよって論語の素読を習っているなどというのは、今日の日本ではもう鶴岡以外にないのではないだろうか。

実は私も子供のころこの城下町に暮したことがある。昭和10年といえば、酒井忠明氏が県立鶴岡中学校を卒業した年だが、ちょうどその春から私の父は遅れて東京高等師範を出た後に、その中学校に歴史の教師として就職し、一家で鶴岡に移り住んだ。家中新町の借家にいたころは、桜の季節から吹雪の日まで毎日のように、妹と一緒にねえやに連れられて、城跡の「公園地」に遊びに行った。いまの致道博物館の前をいつも通っていたわけだ。鷹匠町に引越してから借りたのは、元酒井藩の家老という人の大きな家の一角で、私はそこから朝陽第三小学校に入学して、一年生の一学期いっぱい、昭和13年の夏まで、たんぼの向こうのその学校にかよった。

当時の鶴岡の森閑とした風物はいまも眼前に彷彿として、まことになつかしい。だが、酒井の殿さま、忠明氏や長男で現御当主の忠久氏夫妻にお目にかかるようになるのは、それから50年以上も後で、平成になってからのことだった。あるときは、副島種臣の立派な書がかかっている古い料亭の広間で、殿さま御一家の方々^{あまみ}に現市長の富塚氏も一緒に御馳走になったこともある。忠明氏はまさに殿さまの品のいい鋭い風貌で、私たちの談論風発をにこにこしながら聞いておられた。

忠明氏は20歳前後から和歌をたしなみ、さきの『洗心』まで含めて4冊も歌集を出しているが、そのなかの一首に

殿様と呼ばれて我はおうと答ふ

ふる里人ら皆したくして

というのがある。この殿さまはこの歌のとおりの人だつたらしい。写真家として庄内を歩きまわって農民や漁民とつきあいながら、彼らの働く姿を何千点もの美しい写真に撮った。地域の教育にも、学問にも、産業の振興にも熱心で、それらに関して達意の文章を何十篇も書き、講演もよくした。それらの文章や写真作品は、氏の歿後に出た重い一冊『ふるさとへの光と仰ぎて—殿様酒井忠明氏』（平成17年）に、幾多の追悼・追想の文とともに収められている。

第18代の当主となった長男酒井忠久氏と天美夫人は、父君の遺風をたつぷりと継いで、致道博物館や松ヶ岡株式会社の運営に日々献身しておられる。すでに新しい殿さま夫妻の風格をおびてきたお二人だ。鳥海山と月山と金峯山を三方に仰ぎ、日本海を望む庄内平野は、いまなおどこかに「たそがれ清兵衛」が暮していそうな、美しく高貴な文化を宿す日本のふるさとである。

実り多き子どもワークショップ

学芸員 千葉 真智子

当館では、テーマ展「アートに生きる、アートで元気!」の開催期間中に、現在活躍中の3人のアーティストを講師に迎え、子ども向けのワークショップを開催しました。

第一弾の8月6日は、写真を利用した作品も手がける松蔭浩之さんの「レイヨグラムに挑戦!—カメラなしで、いろんなものを写しちゃえ!」です。一般的に、写真とはカメラで撮るものだと認識があるでしょう。また、今どきの子供たちからすれば、写真は携帯で撮って、気に入らなければ簡単に削除できてしまう存在かも知れません。そこで、カメラを使わず、絶対に消せない写真として、印画紙の上に直接物を置き、光を当てることによって画像が得られるレイヨグラムに挑戦してもらい、その目玉として、子どもたちの身体自体を被写体にしてしまう巨大なレイヨグラムを制作しました。

印画紙は、少しでも光が当たると感光してだめになってしまうため、暗室用電球だけがうっすらと不気味に光る暗いスタジオ内で、怖がる子どもたちの気を紛らわせてあげながらの作業です。松蔭さんの指示のもと、大急ぎで大全紙サイズの印画紙を床一面に敷き詰めると、29人の子ども+松蔭さんが思い思いの格好で寝転び、「5・4・3・2・1」の掛け声と共に光をパシャ! 続いて、50枚ある印画紙を順番に現像液・停止液・定着液に浸し、水洗い・乾燥させる作業に移ります。それは、もう大変の一言。何しろ50×60cm以上ある印画紙は、1枚仕上げるだけでも一苦労なのに、それが延々50枚も続くのですから、終わる頃には、スタッフ一同ぐったりです。しかし完成作は、そんな疲れを吹き飛ばしてしまうような圧倒的な出来栄え。また何より感心したこと、最初は手持ち無沙汰にしていた子どもたちが、自発的に役割分担をして、現像から完成作を並べるまでの各

作業を手伝ってくれたのです。これには、本当に驚きました。

ワークショップを終え、松蔭さんがこの日のために我慢してきたという鰻を食べながら(名古屋名物ひつまぶしを食べるのを楽しみにしていたのです)、スタッフ一同、作品の感動的な出来栄えと子どもたちの自発性を大いに讃えて、1日を締めくくったのでした。



現像した写真を乾かす子どもたち

つづく8月20日は、驚異的なデッサン力をもつ小川信治さんの「無限風景面を作ろう!」です。9月30日に始まる国立国際美術館での個展を控えた忙しい身でありながら、実は小川さんは、この原稿を書いている8月末現在も、ワークショップの最終的な完成のために絵を描き続けてくれています。というのも、このワークショップは、17人の子どもたちが描いた風景画を小川さんの絵でつないで、ひと続きの風景画に変えてしまおうという壮大な内容だからです。

子どもたちには、こちらが用意した34枚の風景写真の中から、

気になるモチーフを選び出して、組み合わせ、自分だけのオリジナルな風景面を作り上げてもらいます。いわば、コラージュ風景です。事前に見本を作ってくださった小川さんは、一言「こんなに難しいとは…」しかし、



絵を描く子どもたち

何のことはない。子どもたちは意外なほど飲み込みが早く、誰一人として躊躇することなく取り掛かると、トイレ休憩もお茶を飲むのも忘れて、黙々と描き続けます。話しかければ、邪魔だと怒られてしまわんばかりの雰囲気です。この驚異的な集中力に深く感心し、また子どもたちが小川さんを「先生」として信頼し、迷った際に質問している姿にも胸を打たれたのでした。

最後を飾る8月27日は、岡崎市在住の作家国島征二さんの「美術で秘密を閉じ込めよう!」。この日は、お弁当持参で、当館からバスで国島さんのアトリエのある額田に場所を移すという、ちょっとしたピクニック気分も味わえるワークショップです。使わなくなってしまったけれど、捨てられない思い出の品や、ガラタだけど大事なものを持ってきてもらい、箱の中に閉じ込めて永遠不滅の美術作品に変えてしまおうという内容で、おもちゃや恐竜の模型、長靴から帽子まで、予想を超えた様々なものが箱に閉じ込められて、思い思いに色塗りされていきます。持ってくるものの選択にはじまり、配置や色塗り。それぞれの子供もたちが、全く違う個性を発揮していて、一緒にお弁当を食べるの1日作業だったこともあり、子どもたちの名前をばっちり覚えた私たちスタッフは、見ただけで、誰の作品かを言い当てら

れるほどでした。こんな親密な形で、ワークショップが進められたのは、日常から少し離れ、木々に囲まれた国島さんのアトリエに行ったからこそこのことなのでしょう。私たちにも、参加した子どもたちにも、忘れられない思い出となり、まさに、思い出の物を箱に閉じ込めながら、その日1日の記憶も永遠に閉じ込めることができたのでした。



国島さんと一緒に作品鑑賞

アーティストを講師に迎えてのワークショップは、当館としては初めての試みで、準備段階では多少の苦労もありましたが、得られたものは、非常に大きいものでした。そして別れ際、参加した子どもに、「今度はいつやるの?」と尋ねられ、やってよかったなとしみじみと感じ、今後、またこうした機会を設けたいと思ったのでした。

特別企画展 徳川四天王 — 天下統一の立役者たち —

学芸員 堀江 登志実

徳川家康の天下統一には譜代家臣の存在が大きな役割を果たしたといえます。なかでも、4人の家臣、酒井忠次(1527～1596)、本多忠勝(1548～1610)、榊原康政(1548～1606)、井伊直政(1561～1602)の存在は大きく、世に徳川四天王と呼ばれています。彼らは家康に仕え、三河統一、遠州における武田氏との戦い、さらには小牧長久手合戦での豊臣秀吉との戦いを経て、関ヶ原合戦まで家康とともに歩みます。

今回の展覧会は、4人の事績をたどりながらその人物像を描こうというものです。ここでは展示内容の紹介を4人の人物紹介とあわせて行いましょう。

プロローグ 徳川家康と四天王

徳川四天王という呼称がいつごろから使われるようになるのかは判然としませんが、四天王の一人本多家の家老を務めた中根家に伝わる18世紀後期の史料のなかに酒井・本多・榊原・井伊を徳川四臣とする記述があるので、四家に対する特別な意識が江戸時代からあったことは確かでしょう。徳川四天王の4人を含め、家康家臣16人を描く徳川十六将図というものが江戸時代から多く作られています、この図のなかで四天王が家康近くに位置するのも、

4人に対する特別な意識があったことを裏付けています。

ここでは四天王の主君である家康資料を中心にしながら徳川四天王の成立について考えます。

第1章 酒井忠次

四天王筆頭は酒井忠次です。忠次は家康より15歳年上であり、若い頃の家康の片腕として活躍します。その戦役は、三方ヶ原合戦、長篠合戦、小牧長久手の戦いなどがありますが、とくに長篠合戦時における鳶の巣山砦襲撃の功績は世に知られています。酒井の戦役は小牧長久手の戦いの天正12年(1548)で終り、天正16年には家次に家督をゆずります。また、忠次の特色として民政にかかわる資料が多く残されていることも特徴的です。永禄7年(1564)に東三河支配を家康から任されてから以降、同地方の支配に関する資料が残されています。ここでは山形県鶴岡市の致道博物館に所蔵される資料などにより忠次の人物像を紹介します。

第2章 本多忠勝

忠勝は天文17年蔵前(岡崎)の地に生まれました。家康より6歳年下になります。生涯五十余度の戦い



酒井忠次所用具足 致道博物館蔵



本多忠勝所用具足 個人蔵



榊原康政所用具足 東京国立博物館蔵

にかすり傷一つ受けなかったとか、蜻蛉切^{とんぼぎり}という名槍を振り回したとか、武勇をもって名高い武将です。武田勢との戦いで「家康に過ぎたるものが二つあり、唐の頭に本多平八」と云われたことは世に知られています。忠勝のこれらの活躍は旗本先手役として先陣を切り、戦いをリードしてきた結果かと思われます。武勇伝が先行している忠勝ですが、ここでは、こうした忠勝の戦場での功績を実証的な資料で示すとともに関東転封後における大多喜、関ヶ原合戦後における桑名、それぞれの地域における領主としての功績にも焦点をあてます。

第3章 榊原康政

康政も碧海郡上野（豊田市）に天文17年生まれました。生まれ年は忠勝と同年です。桶狭間合戦後に家康が大樹寺に入った時に初めて家康に面会したといわれています。康政も軍事的才能に長けた武将で、小牧長久手合戦で秀吉を非難する檄文を飛ばし、秀吉の注目を集めたことは世に知られています。康政の場合も忠勝と同様に旗本先手役として活躍しています。家康が関東に移ると、館林に入封し領内の総検地とともに、館林城の城郭拡張工事と城下町の移転整備を行っています。ここでは、現在の榊原家のほか、上越市の旧高田藩榊原家臣の会である和親会所蔵資料を中心に康政の人物を紹介します。



井伊直政所用具足 彦根城博物館蔵

第4章 井伊直政

井伊直政は遠江国引佐郡井伊谷の出身で、三河譜代ではありませんが家康に取り立てられた武将です。永禄4年（1561）生まれですので、四天王のなかの酒井忠次より34歳も年下になります。直政は武田家滅亡後、同家遺臣を多く付属されますが、山県昌景部隊の赤備え^{あかぞね}を引き継ぎ、朱色で彩られたその軍団は「井伊の赤備え」と呼ばれたことは知られています。直政を含め忠勝・康政の3人は小牧長久手の合戦の頃から敵方である秀吉からも注目され、秀吉政権下の小田原征伐・関東制圧でも大きな役割を果たします。なかでも直政は秀吉との関係が深く、秀吉の意向を受けて箕輪12万石と家康家臣では最高の知行地を与えられます。ここでは、彦根城博物館に所蔵される資料を中心に直政の生涯を追います。

以上、展示の概要を説明しましたが、従来の徳川四天王の人物像は、中村孝也著『徳川の臣僚』に代表されるようにもっぱら『寛政重修諸家譜』など江戸時代の編纂物により記述されてきたものです。江戸時代から現代に至るまで我々の徳川四天王に対するイメージはこの江戸時代の編纂物の延長上にあるわけです。今回の展覧会では四人の人物について、できるだけ原資料によりながら人物像を描き、系譜類では記述されない地域資料をひろいあげ、徳川四天王の実像に迫るのが課題です。

会期 平成18年12月2日(土)～平成19年2月4日(日)

岡崎市・額田町合併記念 額田 —その歴史と文化—

平成18年1月1日、岡崎市と額田町が合併し、新「岡崎市」が誕生しました。これを記念して、旧額田地域の歴史と文化を紹介する展覧会を開催します。

額田町域には、水と緑の豊かな自然のみならず、そこに生きた人々の営みや育まれた文化の足跡が残され、現在に息づいています。ここでは、今回の展覧会で取り上げる額田の歴史と文化の概要をご紹介します。

歴史

額田の原始・古代をしめす遺跡の発見例は少なく、主な遺跡としては、下塚津遺跡(縄文時代)、牧平遺跡、ハツ田遺跡(弥生時代後期)などがあり、いずれも男川沿いなど水利のよい場所にあります。なかでも平成2年より調査が行われた牧平遺跡は、額田町域では初めての本格的な発掘調査として注目され、縄文時代晩期の土器片や弥生時代前期の土器棺墓4基、平安時代の竪穴住居跡、江戸時代の井戸など、縄文時代晩期から近世に至るまでの人々の生活の痕跡が確認されました。

平安時代前期の弘仁4年(813)空海が開いたという桜井寺(桜井寺町)は、山間修行の場として起源があったとみられ、岡崎の滝山寺や設楽の鳳来寺等とともに三河五山の1つに数えられる名刹です。大治2年(1127)の銘のある孔雀文の磬は県内最古の在銘金石文として県指定文化財であり、この他中世後期から近世初頭にかけて三河における白山の先達職をめぐる財賀寺(豊川市)との争いに関する古文書等が残されています。

鎌倉時代に入り、承久の乱(1221)後に足利義氏が三河守護になると、足利一族や家臣達が関東より移住し、三河は足利氏第二の本拠地として重要視されました。額田においても鎌倉から室町時代の中頃までは、足利氏とその一族の勢力が強く、保久の山下氏や秦梨の粟生氏は足利直臣であり、足利氏の執事をつとめた高氏は比志賀郷(白近郷)を領地とし、分家の彦部氏は14世紀半ばに外山などの地頭でした。他にも足利氏被官とみられる柳田の山内氏や形埜の麻生氏、檜山の檜山氏などが勢力を持っていました。

天恩寺(片寄町)は、貞治元年(1362)室町幕府3代將軍足利義満が祖父尊氏の遺命により、近江国永源寺の弥天永釈禪師に命じて創建したとされています。足利氏の帰依が厚く、義満の筆跡を写した扁額などがあり、室町時代建立の仏殿と山門は国の重要文化財に指定されています。

応仁の乱(1467～77)以後、争いが全国に広がる中で、額田と足利氏の関係は終わりを告げ、奥平氏(作手)・天野氏(中山郷)・松平氏(中山郷)等の在地土豪が勢力を拡大しました。なかでも奥平氏が勢力を拡大していましたが、周辺には今川・松平(徳川)・織田・武田など有力な戦国大名がひしめいており、奥平氏は生き残るために状況に応じて次々と属する勢力を変え、身内を人質におくるなどの行動を迫られました。この頃の額田の合戦では、「日近合戦」「両山合戦」「滝山合戦」が特に有名で、なかでも天正元年(1573)の「滝山合戦」は、当時の奥平氏の厳しい状況をよく示しています。ここでは、一族発展の礎となった仙丸の物語をご紹介します。当時の額田の情勢は、今川氏が衰退し、織田氏や今川氏から独立した松平氏が勢力を拡大する一方、元亀元年(1570)には武田氏が三河侵攻を開始しました。奥平貞能は二男仙丸を人質に差し出し、武田氏に属しましたが、元亀4年(1573)4月の武田信玄死去の後、徳川方に寝返りました。奥平氏は同年8月の滝山合戦では、徳川氏の援軍を得て、武田軍に勝利しましたが、その報復として武田方は9月に仙丸ら人質を処刑し、鳳来寺門前にてその首を晒しました。仙丸の乳母達は首級を密かに奪還し、夏山の仙洞庵(遊仙寺)に葬ったとされ、寺には仙丸の墓があり、首級を包んだとされる白布が、遊仙寺近くの華蔵院に伝えられています。白布は小袖を仕立て直したとみられる絹布で、中央部に血痕が色濃く付着し、「為仙丸菩提也」と墨書されています。また裏には華麗な花柄の刺繍をほどこし、桃山時代の特色である縫箔(金・銀の箔を縫い付ける技法)が施された小袖を仕立て直した絹布が縫いつけてあります。制作時期から仙丸の縁者のものである可能性があり、歴史的にも美術工芸品としても貴重な資料です。仙丸の父奥平貞能は、仙洞庵に寺領として「十貫文」



打敷(裏) 華蔵院蔵



打敷(表) 華蔵院蔵

を寄進し、不足ならば作手や佐脇の内からも加える旨を記した寄進状(天恩寺藏)を下しており、仙丸への強い供養の情が表れています。この後貞能の子信昌は長篠の戦い(1575年)で戦功をあげ、家康の娘亀姫を娶り、関ヶ原の戦いの後には美濃加納10万石を賜り、子孫は豊前国中津10万石にて明治に至ります。

江戸時代に入ると、額田は幕府領、大名領、旗本領、寺社領などの支配が入り組み、時代とともに複雑に変化していきます。本展では年貢取立ての実態や入会権をめぐる山論、作物を守る為に築かれた猪垣、櫻山や雨山の百姓騒動などを取り上げ、江戸時代における武士の支配と農民の生活を紹介します。

文化財

旧額田町域には、国・県・市合せて27件の指定文化財があります。なかでも庚申堂(鹿勝川町)に安置されている木造兜跋毘沙門天立像2軀は、平成14年に国の重要文化財に指定され、一躍注目を集めました。兜跋毘沙門

天は多聞天の異形で、外敵から王城を守護するものとして平安時代に盛んに制作されました。両像とも頭に宝冠を載せて、皮鎧を着け、地天女の両掌の上に立っていますが、一軀は腹部に獅嚙と、腹巻状の帯をつけています。ともに頭から地天女までの主要部は桧材の一木造、目は彫眼で、当初は全身に彩色が施されていたとみられ、両腕に持つべき戟、宝塔は欠失しています。いずれも量感豊かな体軀に鋭い彫り込みがみられ、



兜跋毘沙門天立像 庚申堂藏



兜跋毘沙門天立像 庚申堂藏

多少の時代差はあれ、平安前期(9世紀)の作品例として美術史的な価値も高く、古像が2軀揃って伝存する全国的にも貴重な作例です。ただし兜跋毘沙門天は2軀を一組とするものではなく、縁起によると毘沙門天と持国天の二天として祀ってきたようです。

両像が伝来した経緯について、寛政9年(1797)の「三州額田郡鹿勝川村庚申并二天王略縁起」には、「享保年間(1716~36)に紀州日置浦の沖で薬師如来像とともに海中から引き揚げられて日置川町の長寿寺に納められ、乙卯年(享保20年(1735)又は寛政7年(1795))春に額田が譲渡を申し出、丙辰(元文元年(1736)又は寛政8年(1796))暮に船で当地へもたらされた」と記されています。水揚げりの仏像の話は全国に数多く残っており、霊性を付与し、価値を高めたとされます。この庚申堂の本尊青面金剛像も男川の岸に懸かった古い箱に猿が集まっているのを不審に思って開けたところ現れたと伝えられています。

この他、広祥院の延命地藏菩薩、福聚寺の延命地藏菩薩、阿弥陀寺の当麻曼荼羅や熱田神社の脇差及び太刀などの有形文化財、千万町神楽や大川神明宮の農村舞台などの民俗文化財、寺野の大クスなどの天然記念物等の数多くの文化財があります。

本展が、身近な地域の歴史や文化と現在の私たちの生活との結びつき、さらには地域の将来を考えていく手がかりとなれば幸いです。



当麻曼荼羅 阿弥陀寺藏

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2006年10月7日(土)～2006年11月19日(日)

特別企画展 徳川四天王 —天下統一の立役者たち—

徳川家康の天下統一には、徳川四天王と呼ばれる酒井忠次、本多忠勝、榊原康政、井伊直政の四家臣が大きな役割を果たしました。彼らは若いときから家康に仕え、三河の統一、武田氏との戦い、秀吉との戦いを経て関ヶ原合戦まで家康とともに歩みます。今回の展覧会では4人の家康部将に焦点をあて、人間像とその生涯を紹介いたします。
(11月20日～12月1日展示替のため休館します)

2006年12月2日(土)～2007年2月4日(日)

岡崎市・額田町合併記念 額田 —その歴史と文化—

2006年1月1日に岡崎市と額田町が合併し、新「岡崎市」が誕生しました。これを記念して、額田町の歴史と文化を紹介する展覧会を開催します。本展を通じて額田町への理解を深めるとともに、古くから岡崎と深いつながりを持つ額田を通して新たな視点で岡崎をとらえ直してみたいと思います。

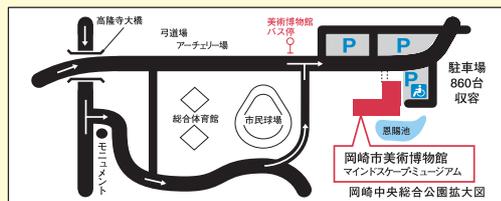
■サタデーナイト・シアター

岡崎市美術博物館では、10月と11月の毎月第2土曜日午後6時より、無料の映画上映会を開催しています。

- 【上映作品と概要】
- ① 「はなればなれに Bande à part」(1964年/96分)
上映日時/10月14日(土)午後6時～
 - ② 「女は女である Une femme est une femme」(1961年/84分)
上映日時/11月11日(土)午後6時～
各回とも定員先着70名 会場/当館1Fセミナールーム

- 開館時間/午前10時～午後5時
午前10時～午後8時30分(6月～11月までの土曜日)
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
- 休館日/毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない)
年末年始(12月28日～1月3日)
※展示替えのため臨時休館することがあります。

- ◎公共交通機関/名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
(名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
- ◎タクシー/名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
- ◎自家用車/東名高速道路・岡崎ICから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース/アルカディア】

●Arcadia 第30号 ●2006年10月発行 ●編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000(代表)

ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka111.htm>



本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。